



山陽小野田市ふるさと文化遺産

「窯のまち」を登録しました

☎ 社会教育課 (☎ 82-1205)

「窯のまち」の物語 詳しい物語の内容は、市ホームページに掲載しています。



山陽小野田市の窯業は、古墳時代から現在に至る長い歴史の中で形態を変えながら、人々の生活に深い関わりを持った産業のひとつです。山陽小野田市の地形や風土が活かされており、当時のまちの発展や、新しいまちづくりの基盤となっています。今も小野田地域には窯業の歴史を物語る数多くの遺産や造形作品があり、窯業との深い関わりが分かります。

古墳時代の焼き物「須恵器」

長門国(県域西・北部)では、山陽小野田市須恵と宇部市東岐波で須恵器生産が開始され、本山半島に形成された窯は10数基確認されています。最古の窯は松山窯とされ、窯本体は現存しませんが、灰や焼き損じ品などの投棄場所である灰原の発掘調査が行われ、6世紀末から7世紀初頭の製品(写真①)が出土しています。



小野田の皿山

江戸時代に有帆川の東側に位置する旦で焼き物窯が築かれたのが、小野田の皿山の起源です。明治10年代以降は、セメントや硫酸の製造にあわせて、製陶所で焼成される製品も変わり、その代表的なものとして硫酸瓶(写真②)があります。硫酸瓶とともに、その後生産額を上げる製品が焼酎瓶です。昭和26年度、小野田市の統計では、市内に26工場、30数基の登り窯を数え、陶瓶工業は有力な地場産業でした。(写真③ 昭和15年ごろの河野製陶所)



近代産業と小野田の窯業

セメント製造会社と硫酸製造会社の2社が創業し発展したことにより、小野田は、山口県における近代産業都市の先駆けとなりました。硫酸瓶のネジ式の蓋の開発に成功し、また良質な陶土に恵まれ品質が良かったことから、信楽などの他地域の生産量を抜いて全国最大の産地となり、硫酸瓶といえば小野田と言われるほどになりました。現在、市内の緑地や道路では、硫酸瓶を活用した景観(写真④ 東沖緑地の陶製ウォール)がみられます。



ガラスアートのまちづくり

ガラスも窯を使う窯業のひとつです。昔からの窯業を伝承しつつ新しい市の文化を創造し、全国へ発信しようとしたとき、窯業のひとつであるガラスに注目しました。「ガラスアートのまちづくり」に取り組むきっかけは、ガラス造形作家の故竹内傳治氏の存在でした。現在、その遺志を受け継ぎ「現代ガラス展」を3年に1回開催しています。市内の公共施設等では、ガラス造形作家と市民が共同制作したガラス作品を多数展示しています。(写真⑤ 市立ねたろう保育園ガラス壁画)



窯業の歴史が溶け込むまち山陽小野田

須恵器から硫酸瓶に至るまで、小野田の皿山製品(写真⑥)は窯業が盛んな他の地域とは、また違った個性を放つ、山陽小野田市の貴重な財産です。現代のガラスアートへと脈々と受け継がれる窯業をこのまちの伝統産業とし、その物語を紡ぐふるさと文化遺産「窯のまち」を継承していきましょう。

